

---

# 視線

なんがー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

視線

### 【Nコード】

N3297B

### 【作者名】

なんがー

### 【あらすじ】

数日間高熱に悩まされた幸治は、自分を監視する何者かの視線に気が付く。

「はあ……はあ……」

一人の青年が街をさ迷っていた。格好に特に不自然な点は見られない。だが、彼は時々周囲を見回しては何かに怯えているようだった。

「何なんだ……一体」

幸治はある時を境にして、不可思議な「視線」を感じるようになった。それは突然原因不明の高熱によって、一週間寝込んでしまったことがきっかけだった。

寝込んでいる間、彼の体からは尋常ではないほどの汗が吹き出していた。同時に今まで体験したことがないほどの凄まじい頭痛に襲われ、幸治は悲鳴を上げんばかりに苦しんだ。

頭ばかりでなく四肢がバラバラになって、体が勝手に解体されてさえいくような感覚……。

誰かがバラバラになった自分を持ち去るよう恐怖……。

夢とも現ともつかない感覚を味わいつつ、彼は、このまま自分が死んでしまうのではないかとすら思えた。

「何だろう……?」

ベッドから起き上がった幸治は部屋の中を見回した。すでに熱も頭痛もおさまっているようである。

……俺が寝ているベッド……机と椅子……テレビに棚……冷蔵庫……。

頭をユルユルと動かして眺めた部屋の様子は、ちっとも変わってはいなかった。真正正銘自分の部屋である。

だが同時に、彼はどこかに一抹の不安を感じていた。

頭痛に苦しんでいる間、幸治の感覚は徹底的に狂っていた。それによる異常な恐怖を感じたりもした。しかし、頭痛が今やおさまっているにもかかわらず、幸治はどうにも体に染み付いた、自らの狂った感覚を忘れ去ることができなかった。

その恐怖に起因する「不安」である。

幸治の不安は、変わった形での中した。

部屋の中には確かに自分ひとりしかいない。それなのに、彼はあらゆる種の違和感を……「誰か」が自分を見つめているような感じがした。彼には彼女などはいないため、そういった人が部屋のどこかにいるというわけでもないのに、である。

「まさか俺を慕う女が誰か……そんな訳ないか」

そうでなかったら幽霊か何かの類だろうかとも思ったが、すぐにそういった考えを脳内で打ち消した。もともと彼は幽霊だとか、神様だとかは信じていない性質たちであった。

結局、彼は「気のせい」と断じて外出することにした。

「気持ち悪いな……本当に」

先ほど「気のせい」と断じた違和感が、今度は家を出てからもくつついて来る。一体どうということだろう。

恐ろしくなって周囲を見回してみたものの、自分を見つめる誰かの影は愚か、人っ子一人猫の子一匹見当たらない。

もしかして自分は一週間高熱を出したために頭がおかしくなってしまったのだろうか。それでこうした奇妙な妄想に囚われてしまった……？

そうした考えが頭の中で浮かんで来る。だが、それは彼にとって「最悪の事態」とも言えるものであり、すぐに「自分はおかしくなどない」という一念が、彼の思考を塗り替えた。

幸治は試しに人混みの中に入ってみる。

「自分はおかしくない」という結論に達した彼は、もしも誰かが自分を監視しているのだとしたら、人混みの中にさえ入ってしまったら、その誰かが自分を見失って、視線から逃れられると思ったからだ。

しかし、いくら人の多い方へ多い方へと進んでも、視線は正確に自分を狙い済まして追いかけてくる。

「痛っ……気をつける！」

「すみません……」

あまり視線から逃れようと歩を進めるあまり、人混みの中で男にぶつかってしまった。視線から逃れるために歩き回ったことによる疲れと、突然のことに対する驚きで呆けた返事を返してしまう。がっしりとした体つきのその男は、幸治の顔を睨み付けるといきなり怒鳴りつけた。

「お前、人にぶつかっというその態度は何だよ！ちよっこっちに  
来い」

男は幸治の首根っこを掴んで物陰に連れ込んだ。幸治の方でも、抵抗もせずに連れて行かれてしまう。

幸治は物陰で男に何度も殴りつけられた。さんざん殴った後で気が晴れたのか、やがて男はどこかへと行ってしまった。

幸治はその最中でも、あの「視線」を感じていた。

「はあ……はあ……はあ……」

一人の青年が街をさ迷っていた。格好に特に不自然な点は見られない。だが、彼は時々周囲を見回しては何か怯えているようだった。

「何なんだ……一体」

もはや時刻は夜になっていた。幸治は「視線」から逃れるために今日一日、方々を歩き回った。だが、やはりその視線から逃れることはできそうもない。

「やっぱり俺、頭がおかしくなったのか……？」

幸治は今までの自分の行為を振り返ってみたが、やはり誰かに監視される筋合いなど無きに等しい。

「もう嫌だ……何がどうなってるんだ……」

視線を感じつつ、力なく呟きながら力なく道を歩き続ける。すると、突然横合いからクラクションの甲高い音が聞こえてきた。幸治はハツとして音のした方を向いたが

「“幸治”のプログラムを削除しました」

眼鏡をかけたプログラマーが、隣いた上司らしき男に報告する。

「お疲れさん。でもバグが出るなんて思ってなかったんだけどなあ。しかも“ゲーム中のキャラクターがプレイヤーの視線に気が付く”なんて内容の。でもまあ仕事が一つ片付いたから良しとするか」

オフィスの中のパソコンのモニターからは、あるゲームのコマーシャル映像が流れていた。

「我がA社の提供するリアルライフ・シミュレーションは、プレイヤーの皆様が神の視点となって、ゲーム中に登場する任意のキャラクターの生活を24時間観察できるといふゲームです。衣・食・住はもちろんのこと、ご要望によってはキャラクターの性生活までも観察することも可能！」

お申し込みはこちらのWebサイトへ」

世界は、今日も誰かに覗かれている。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3297b/>

---

視線

2010年11月3日14時21分発行